

# マダムとムッシュ



*photo by ai*

**story by aono**



猫のマダムはため息をつきながら、庭の雑草とたわむれている愛娘のジェーンを見下ろしていた。

「私の可愛いジェーンに何事も起こらなければいいけれど……」

子猫だったマダムが、郊外のこの家に貰われてきたのは、4年ほど前になる。

町から少し外れた小さな丘の住宅地に、マダムの新しい家は位置していた。

ここは動物を飼っている家が多く、猫や犬は言うに及ばず、小鳥、フェレット、アライグマに至るまでペットになるものなら何でもの状態だ。

町の人々はこの丘を揶揄を込めて『アニマルヒル』と密かに呼んでいる。

飼い主に恵まれ、なんの不自由もない日々を送っていたマダムが子猫を産んだのは春先の事だった。

マダムと呼ばれるようになったのはその時からである。

ミステリー好きの飼い主がつけた正式な名前はミス・マープルだったが、母親になってもミスでもなかろうと、マダム・マープルになり、結局はマダムと呼ばれるようになった。

3匹の子供たちのうち、2匹は養子に出され、マダムの手元にはジェーンだけが残った。

マダムはそれでもとても幸福だった。そう、あの事件が起こるまでは……。

『アニマルヒル』では、子猫があいついで行方不明になるという出来事がおこっていた。

最初にいなくなったのは、二軒先に住むレイモンドだった。

やんちゃな子猫だったレイモンドが失踪したときは、すぐ帰ってくるだろうと誰もが思っていた。

「いずれ泥だらけになって戻ってくるわ」とレイモンドの母親さえそう考えていた。

しかしそれは誤りだった。

もうひと月も経つのに、レイモンドは行方不明のままだ。



次は、やっと目があいたばかりのモナミだった。

丘の頂上にある、大きな家で飼われているシャム猫アガサの子供だ。

一緒に生まれた5匹の中では、一番小さくて弱々しい。

モナミが自分でどこかへ行く筈がない。

「不審な人は誰もいなかったのよ」 涙ながらに母猫はマダムに訴えた。

「誘拐されたんだわ。どこかへ売られてしまうわ」

飼い主がほんの数分、子猫たちを入れた籠をテラスに出した間の事だった。

籠から這いずり出した他の子猫たちに母猫が気をとられている間に、モナミは消えていた。

「一体、だれが何処へ連れて行ったの？ 私のモナミを返して……」

アガサはショックのあまり半狂乱になっていた。

マダムには慰める言葉もなかった。

ふたつの事件を思い出しながら、マダムはジェーンを見守っていた。

ジェーンは無心に草と戯れている

そんな矢先、レイモンド、モナミに続いて、3匹の子猫が次々にいなくなった。

今度は自分の家の子猫かもしれない、と母猫たちが怯える日が続いた。

マダムも例外ではない。

「誘拐事件の捜査は他の猫たちに任せて、私たちは子猫から目をはなさないようにしましょう」

自分の子猫ばかりでなく、この町全ての子猫を守ろうと母猫たちは話し合っていた。

「人間や他の動物たちの会話に注意をはらっていきましょう、きっと何かが見えてくるはず」 とマダムは長年の経験から信じていた。



あくる日から玄関の階段の上に陣取って、通行人の話に耳を傾けているマダムの姿が見られるようになった。

「もう、放ってはおけない」と町で一番の長老の猫であるスペンスが宣言した。

この丘を含む町全体の動物たちの誰よりも古くから、ここに住んでいる老猫だ。町の入り口にある駐車場をねぐらにしている。

「子猫のいる母親以外の全員で会議を開くことにする。明日の夜、人間たちが寝静まったら町の中央公園に集まるように」

春の夜は程よく暖かい。

そんな気候もこの丘に住む猫たちには、今は何の慰めにもならない。

次の日の深夜、長老の命令に従って公園に集まる猫たちの影を、街燈が長く伸ばしていた。

マダムは、公園へと急ぐ猫たちを塀の上から見つめていた。

ジェーンが庭から消えたのは、それから一週間ほど後、マダムがほんの一瞬目を離した隙のできごとだった。

マダムにとって、通行人の話に耳をそばだてる事は、重要な日課となった。

「私にできる事は限られている。情報を聞き逃さない事、それが一番大事だわ」

普段はめったに声をかけない散歩中の犬たちにさえ、マダムは階段の上から話しかけた。

「ジョン、町で子猫をたくさん集めている人間の噂を聞かない？」

「う〜ん、知らないなあ。ゴールデン・レトリバーのメリーが8匹も子犬を産んだって話は聞いてるけどね」「行方不明になっている子犬はいるのかしら？」

「いないよ。猫とちがって、犬は人間に行動を管理されてるから、そんな話があれば耳に入るはずだ」

「そうだったわね。また何か聞いたら教えてちょうだい」

「ああ、役に立ちそうな話があったら知らせるよ」

ブルドッグのジョンはヨタヨタと飼い主にひきずられるようにして、マダムの視界から消えていった。

マダムは庭を見下ろした。いないと分っているジェーンの姿を無意識に探しながら、ため息をついた。

庭では、木蓮の木にひよどりがとまって、花のつぼみをつついている。

「ひよどりさん、空からなら色んなことが見えるでしょう？ 子猫たちをみかけなかった？ 人間にさらわれたらしいのよ」

「私たちは木から木へと飛んでいるから、人間世界のことはよくわからないわ。人間の事ならカラスさんに聞くといいわ。カラスさんは人間の残飯を食料にしているから、何か知ってるかもしれないわよ」



「マダム、ご心配でしょう」

階段の下からマダムに声をかけたのは、去年の冬に、遠くの町から流れてきた猫だった。

気取った物腰と低音で話す彼は、この『アニマルヒル』で「ムッシュ」と呼ばれるようになっていた。

「おや、ムッシュ。朝のお散歩ですか？」

「いえいえ。私は見回りをしているのですよ」

「見回り？ ムッシュが？」

「おかしいですか？ 私でも見回りくらいしますよ。勿論私の鼻の神経を最大限に働かせながらね」

「この町の猫たちが、全員で子猫の行方を探しています」マダムは訴えた

「フン！」 ムッシュは鼻を鳴らした。

「彼らはまるで犬のように地面を嗅ぎまわり、なにか手がかりはないかとあちこちの茂みに鼻を突っ込んだりしていますよ。私に言わせると、まるで意味のないことですがね」

マダムは少々気を悪くして言った。

「ムッシュは別の方法で調査するのでしょうか？」

「私は情報を収集します。ここでね」とムッシュは自分の鼻を指した。「そして解決するのです」

謙遜という言葉を持たないムッシュに、マダムはあきれて話題を変えた。

「ムッシュもこの丘にすっかり馴染んだようですね」

「はい、ここは猫の私にとっては心地の良いところです。動物も多いですからね。しかし町の間人たちは別の考えのようです」

「そうらしいですね。私もその噂は、ここを通る犬たちから聞きましたよ」

「動物嫌いの人間が多くいるというのは、嘆かわしい事です。『アニマルヒル』だなんて、ちょっとした悪意さえ感じられます。まあ、確かにアニマルヒルには違いないんですが」

ムッシュは、長い髭をゆらしながら首を振った。

マダムの顔が曇った。

「子猫たちを誘拐したのも、そういう人間でしょうか」

人間たちは行動範囲が広い。人間にさらわれたのなら、もう遠くへ連れて行かれてしまった可能性が高い、とマダムは考えた。

「希望を失ってはいけません、マダム。この町にまだいると私は思っています」

「どうしてそう思います？」

「私の勘がそう教えています。それにカラスから仕入れた情報もありますからね。この町のどこかに子猫たちは隠されていると、私は殆ど確信しております」



「さて、そろそろ失礼をしなければなりません、マダム」

ムッシュは慇懃に一礼をした。

「人間たちの話も聞いてまわらなければなりませんから、これから町へ出かける事と致します」

「子猫たちを見つけてくださいね、ムッシュ。お願いします」

「おまかせください。私に解決できない問題はありません」

そう言い残して、ムッシュは自慢の髭を揺らしながら去っていった。

マダムは疑わしげな目でムッシュの後姿を見送った。

「カラスがそんなに役に立つのかしら……」

「マダム！」と呼ばれて下を見るとペルシャ猫のアリアドニがマダムを見上げていた。

「アリアドニじゃないの」 マダムは少し意外な感じを受けた。

いつもは気取って、他の猫に自分から声をかける事のないアリアドニがマダムを呼ぶなんて、珍しい事もあるものだ。

「さっきここにいたのは、ムッシュでしょう？」

「そうだけど？」

「彼が、いよいよのりだしたのね」

「どういうこと？」 マダムにはよくのみこめない。

「ムッシュは有名な探偵ですもの。彼に任せておけば大丈夫よ」 アリアドニはしたり顔でうなずいた。

「ムッシュは探偵なの？」

「他の町では有名よ。もっとも、私も飼い主のマーシャに連れられて行った町で聞いたんですけどね」 アリアドニは得意そうに鼻をうごめかした。

「私はこれから美容院へ行くの。急いで帰らないと」 と言いながら、長くて白い毛にマダムの家の枯草をいっぱいくっつけて走り去った。

「誰でもいいわ、子猫たちを見つけてくれれば……」 マダムは深くため息をついた。

「それにしても、アリアドニは一体何を言いに来たのかしら？」



『アニマルヒル』から町へと下りてきたムッシュは、建物の陰を選びながら用心深く歩いた。流れ猫のムッシュにとって、人間は大の苦手だ。

この町ではまだそのような経験はないが、人間の中には棒を持って追いかけてくる者もいた。「この泥棒猫！」 「野良猫め！」 などの罵声が浴びせられるのもしょっちゅうだった。ムッシュとて生き物、食事はしなくてはならない。

しかも美食家としての誇りを持つムッシュが、ゴミ箱の中の残飯で満足するはずがない。いきおい、店先の物やテーブルの上の食べ物を失敬することになり、結果として、人間から追いかけられる羽目になる。

勿論、ムッシュほど賢ければ捕まる事はないが、いままで住んだ町では悪名高い猫になっていた。

彼が一ヶ所に住み着くことをしないのも、そこに原因があった。



一方、動物の世界でのムッシュは探偵として名を馳せていた。

ムッシュに頼めばたいいの事件は解決する。

有名になりすぎるのも困ったものだと、ムッシュは考える。

以前住んでいた町からここへ移住してきたのも、煩わしさが高じての事だ。

『アニマルヒル』やこの町では、今のところ、さほど目立たなく生きていける。

ムッシュを気に入っているか、単に猫好きかはわからないが、裏口に残り物を置いてくれる家も2、3軒できた。人間が見ている間は決して食べ物に近づかないのが、流れ猫の鉄則だ。

姿が見えなくなっても、人間はどこかで覗いている事があるとムッシュは知っていたので、すぐには食べ物には近づかないし、例え空腹であっても不味いものには見向きもしない。

それでも生きていくのに充分で、しかもムッシュの味覚を満足させるのに足る食料が、ここでは手に入った。

「何事もおこらない平和な生活も、退屈ではあるが我慢できないわけではない」

ムッシュは今の環境に満足していた。

だが、持って生まれた好奇心と探偵としての誇りが、ムッシュをこの事件の傍観者にはしておかなかった。

町の市場へ向かう通りに、砂利を敷き詰めた駐車場がある。

そこをねぐらにしている長老のスペンスは、今日も寝そべって、周囲に目を光らせていた。



「そこへ行くのはムッシュじゃないか」

「これはこれは、スペンスさん。その後何か分りましたか？」

「ウム、皆一生懸命探しているが、これといった収穫はないようだ」

「私が子猫たちを見つけたら知らせに来ますよ。その時は町中の動物達を総動員してください」

「何？ おまえさんが見つけると言うのかね？」

「もちろんです。この町の何処かにいるとの感触を得ましたからね。おまかせください」

「いやはや、聞きしに勝る自信家だ」 スペンスはあきれたように首を左右に振った。

ムッシュはそんな言葉は聞こえないかのように、悠然とスペンスのそばを離れた。

ムッシュが向かったのは、この町の中心にある市場だった。

買い物客でにぎわう昼前後は、情報を収集するのに最適だ。

果物や野菜が並べられた台の下にもぐりこむと、ムッシュはまるで獲物を狙う時のようにうずくまると、気配を消した。

ムッシュの鼻先を、男や女、子供や老人の足が通り過ぎていく。

しばらくすると、値段の交渉をしている客や店主のほかに、雑談をする客の声がムッシュの耳に入ってきた。

ムッシュは忍び足で、声のするほうへ移動した。

「家から、裏の川へ出る途中に空き地があるんだけど、そこにノラネコがいるの」と若い娘の音がする。

「ノラネコ？」と返事をしているのは年配の女の声だ。

「子猫を連れてくるノラネコで、ケンの散歩の途中に必ずいるのよ。ケンは犬なのに人間ばかりじゃなく、猫にも友好的でね」

「確かにケンじゃ、番犬にはならないわね」年配の女は笑って答えた。

「まったくそうなのよ。ダックスなんだから本来は猟犬のはずなのに。猫のほうは好戦的で、ケンが近づくとウーッと唸るし……。私も最初は無視していたんだけど、子猫のほうがお腹を空かしているらしくて、私のほうへ寄って来ようとするんだけど、母猫が威嚇するの」

「そりゃそうでしょう、ノラネコなら当然よ」

「でもね、ケンの散歩の帰りにそこを通ると、まだいるのよ」

「そこがそのノラちゃんの棲家なんでしょう」年配の女は面白くもなさそうな声を出した。

「何回もそんなことがあるので、かわいそうになって、この間猫の餌を持って出かけたの」

「ノラネコに餌をやると近所の人のお金を買いますよ」

「そうなんだけど……。でもかわいそうじゃない？ それで餌を目の前に放り投げてやったんだけど母猫が警戒して食べないのよ。私の姿が見えなくなってからやっと食べたけど」

「どうしてわかるの？」

「だって、隠れて見てたんですもの」

「あなたも物好きねえ」年配の女はあきれたように言った。



あとの会話は、買い物客の騒音の中に溶け込んで聞こえなくなった。  
「たしか、カラスたちが川べりで急に食料が増えたと話していたな。調べてみる価値はありそうだ」

ムッシュはその場を離れ、市場の端までやってきた。  
若い男が2人、腕を組んで話に夢中になっている。  
「このごろ、マイクのやつおかしくねえか？ トム」と赤い髪の男が言う。  
「俺もそう思う」 トムと呼ばれたのは、金髪を固めて角のように立てている男だ。  
「あいつ一体なにやってんだ？ ここんとこ部屋からでてこねえぜ」  
「確かに付き合いがわるくなったな」  
「儲け話を隠してるんじゃないかなあ？ どっかでうまい話でも嗅ぎつけたのかもしれない」  
「そんなのは許せん。これから行って確かめようぜ。独り占めならとっちめてやる」  
「全くだ。新参者のくせして、俺たちをだしぬこうたって、そうはいかねえよ」  
2人の男は並んで川のほうへ向かって歩き出した。  
ムッシュも2人の後を追った。



2人の男の後をつけて行くと、川の近くの空き地に出た。

草むらの陰に一匹の子猫がうずくまっている。

子猫だけでこんな所にいるのは危険だ、とムッシュは子猫のそばへ近づいた。

すると、子猫のうしろから母親と思われる猫が顔を出した。

「ひさしぶりね、ムッシュ」

「その声はミセス・バントリーじゃありませんか。またどうしてこんなところに？」

「あなたと同じよ、ムッシュ。流れてきたのよ」

ミセス・バントリーとは、ムッシュが以前住んでいた町で、お互いに流れ猫として顔見知りだった。

「ほう、何かありましたか？」

「前いたところでいやな事件があったので、逃げてきたわけ」

「いやな事件？」

「ええ、私たち猫にとっては、かなりひどい事件だったわ」

「どんな事件です？ 差し支えなければ話してもらえませんか？」

猫の親子は草むらから出てくると、ムッシュの前に座った。

「ムッシュが町を出て行ってから、しばらくは何事もおこらず、平和だったのよ」 とミセス・バントリーは話し始めた。

「ところがある日、ヴェラの産んだ子猫がいなくなったんです。ヴェラを覚えているかしら？」

「覚えていますよ、確か教師の家に飼われていた猫でしたな」

「ヴェラは5匹産んだんだけど、2匹いなくなったのよ。まだ2ヶ月で可愛い盛りだったのに」



photo by ayumi

「確かアビシニアンでしたね」

「ええ、それで最初は、ペット業者にでもさらわれたと皆思ってたの。人間の世界では高く売れるそうなのね」

ミセス・バントリーはそこで一息ついた。

「最初は、という事はまだ事件は続いたのですね」 ムッシュは先を促した。

「ヴェラの事件は、ほんのはじまりだったわ」

ミセス・バントリーは傍らの子猫に視線を移した。

「私達みたいな流れ猫は、追い払われこそすれ、さらわれるなんて事は考えもしないわ」

「まあ、そうですね」

「ところが次になくなったのが、レモンの子供だったの」

「レモンといいますと、空き家を棲家にしていて、あのレモンですか？」

「ええ、生まれた子猫は、お世辞にも可愛いとはいえなかったのよ。父親があのジョージですからね」

「容姿の点で、その子猫は恵まれなかったかもしれませんな」 ムッシュはジョージとレモンの顔を思い出しながら、慔然として答えた。

「しかし、猫は容姿ではありません。ここですよ、ここ」 とムッシュは自分の鼻をさした。

ミセス・バントリーはそんなことには頓着なく話を続けた。

「レモンの住んでいた辺りは、食糧事情がよかったみたいで、子猫はまるまると太っていたわ」

「遺伝という事も考えられます」 ジョージの体型では歩くのも大儀だろう。

「とにかく、なくなったのは血統書のついた猫ではなかったのよ」

「子猫の消えた事件は、その2件だけですか？」

「とんでもない！ 私が町を出るまでに少なくとも10件はあったわ。それで怖くなってこっちに移ってきたんだから」

「この町でも、今、似たような事件が起こっています」

「その話は聞いたわ。どの町も安全ではないということね」

「ご心配なく、ミセス・バントリー。私が解決してみせますよ」

ミセス・バントリーはムッシュの言葉を完全に無視した。

「じゃ、ムッシュ、私はそろそろ食べ物を探しにでかけるわ。時々えさをくれる奇特な人間もいるのよ」

「もうひとつ伺いたいのですが、ミセス・バントリー」

「なにかしら？」

「カラスの話によると、近頃このあたりに食料が増えたそうですが？」

「人間の残飯の事ね。 そういえば増えたわね。えさを探するのに苦労しなくなったわ。空き地や川のそばで、すぐ見つけれられるしね。たいていはキャットフードの空き缶とか残りとかだけど、カラスは何でもたべるから」

「充分気をつけてください、ミセス・バントリー。どこに犯人がいるかまだわかりませんから」

「大丈夫、私はこれでも色々な修羅場をくぐりぬけてきたのよ。私の子猫は自分でしっかりと守るわ」



「ミセス・バントリーは、私の能力をご存知ないらしい」 ムッシュは自慢の髭をなでながら呟いた。

「しかし、さっきの話は気になる。あの2人の男はマイクを新参者と言っていたが、残飯となにか繋がりがあがるかどうか、調べなくてはなるまい」

ムッシュは2人の男が消えた方向へ向かって歩き出した。

やがて、川べりで争う人間の声が聞こえてきた。

ムッシュはめだたないように、男たちに近づいた。

人間たちは、ムッシュがそばでウロウロしても何も気にしない。猫に人間の言葉が分るなどは、夢にも考えていないだろう。

争っていたのは、3人の男たちで、そのうちの2人はさっきの若者だった。

「新参者のくせして、抜け駆けをしよってんじゃないだろうな、マイク」 赤い髪の男がマイクの胸をこずいた。

あれがマイクか、ちょっと待てよ、見た事がある顔だ。ムッシュは記憶を辿ったが、すぐには思い出せない。

「オレは何もしてねえよ、ビル」 マイクと呼ばれた男は口ごもった。

「お前が何か隠してるのは、俺たちには分ってるんだぜ」 赤い髪のビルはマイクのむなぐらを掴んだ。

「別に隠しているわけじゃ……」 マイクは足を震わせていた。2対1では勝ち目がない。

「じゃあ、さっさと吐いちまえ」

「儲け話を独り占めしようってんじゃないだろうな」とそれまで黙っていた金髪のトムが口を挟んだ。

「そんな、儲け話だなんて……。オレはただ子猫を集めているだけだ。他に何もしちゃいねえよ」

「子猫？ 何のために？」

「ここじゃ言えねえよ。知りたかったら、ついてこいよ」 マイクは観念したのか、開き直ったように答えた。

マイクを先頭に3人は歩き始め、やがて見えてきた小屋の中へ入っていった。

小屋の周囲はゴミでいっぱいだ。

ムッシュは窓から中を覗き込んだ。中にはダンボールがいくつかおかれ、子猫のなく声が聞こえてくる。

「子猫をこんなに集めてどうするんだ？」 トムが聞いている。

「頼まれたのさ」

「だれに？」

「前に住んでた町で会ったおっさんにさ」

「へえ、物好きなやつもいるもんだ。一体何に使うんだろう」

「料理するらしい」

「なんだって？ 猫を食うのか？」

「生贄するとか、子猫に悪魔が乗り移っているとかなんとか言ってたな」

「おいおい、そいつはかなり危ないぜ。変質者か狂信者じゃないか」

「金さえくれればどうでもいいさ。今の仕事じゃ食っていけねえよ」 マイクは平然と答えた。

ムッシュは厳しい顔で窓から離れると、全速力で町まで戻った。



町に着くと、ムッシュは最初に、長老のスペンスのいる駐車場に向かった。

「スペンスさん、子猫たちの居場所がわかりました」

「ほんとか？」 スペンスは、半分閉じていた目を大きく見開いた。

「どこにいたんだ？ すぐ助けにいかねば」

「まあまあ、慌てないでください。相手は人間だから、それなりの計画が必要です。しかし早急に助けないと、子猫たちはどこかへ連れて行かれてしまいます。そうすると、また見つけるのは至難の業でしょう」

「子猫たちは全員無事かね？」

「そう願いたいですが」 ムッシュは言葉を濁した。

「至急全員に招集をかけよう」

「我々だけでは無理でしょう。犬や鳥の協力も仰がないと」

「そうだな、助っ人を頼むとするか。私に任せてくれ」

「お願いします。私は計画を練ることといたしましょう」

ムッシュは綿密な計画を立てると、スペンスと打ち合わせを行った。

一足先に、子猫たちのいる小屋へ向かったムッシュは、ミセス・バントリーの協力を得て、小屋の見張りを始めた。

ミセス・バントリーの子猫は、しっかりと母親のそばにくっついている。

耳をすますと、微かに子猫たちのミャーミャーという声が聞こえる。

「かなりの数ですな」 ムッシュは呟いた。

「ちゃんとえさはもらっているのかしら」 ミセス・バントリー声は怒りで震えていた。



「あのマイクという男、どこかで見た事があると思っていましたが、思い出しましたよ。かなり前になりますが、ここから20キロほど離れた村で、会ったことがあります」

「ムッシュが？」

「そうです。もう3年ほど前になりますが、その村で問題を起こして村から出て行きました」

「どんな問題をおこしたの？」

「鳥や猫、犬にいたるまで、理由もないのに棍棒で殴りつけたんですよ。足が折れたり、髭を切られて悲惨な目にあった猫もいました。鳥や犬も同じです」

「とんでもない野郎だわ」

「動物の屑ですな。人間だって動物ですからね」

「あいつはここに住んでいるわけじゃないでしょう？」

「マイクは町外れの小さなアパートの1室に住んでいますよ。この町に来て、検針員の仕事を果たようです」「検針員？ 電気とか水道のメーターを見る仕事？」

「そうです、この町は小さいですからね、全ての検針を1人で請け負っていたようです。誰にも疑われず家の周りをうろつけるわけです。みんな、見ているようで見ていないのです、猫でさえもね」

その時、人間の話し声が聞こえてきた。

「マイクひとりではないようですね」 現れたのは、マイクと見知らぬ男だった。

ムッシュとミセス・バントリーは耳をそばだてた。

「猫どもは生かしてあるだろうな？」

「もちろんです、言われた通りにえさもやり、水も取り替えていますよ」 マイクにしては丁寧な言葉を使っている。

「全部で何匹いる？」

「ダンボール1つに5匹ずつ入れてますから、15匹かな」

「今夜12時に、俺の家まで運んでくれ。これが報酬だ」 男はマイクに何枚かの紙幣を渡した。

「わるいっすね、こんなに貰って」 とマイクの嬉しそうな声がする。

「頼んだぞ」 と言い残して、男は小屋を離れた。

マイクはダンボールから子猫たちを出すと、えさと水を与えた。

「お前たちは金づるだからな。トムとビルにみつかるとは思わなかったぜ。あいつらは全くハゲタカだ。今夜、猫を引き渡したらさっさとトングラするさ。だれが分け前をわたすもんか」

マイクは子猫をダンボールに戻し、残飯を小屋の外にばら撒くと、そのまま出て行った。

「ぎりぎりのところでした」ムッシュはフーツと息を吐いた。

「明日では間に合いませんでした」

「ほんとうに、危ないところだったわ」 ミセス・バントリーは体を奮わせた。

「マイクは夜まで戻ってこないでしょう。それまでに全員をこの小屋の周りに集めなければなりません。私は一度長老の所へ戻ります」

「私は何をすればいいの？」

「あとは長老たちに任せましょう。あなたはご自分の子猫をしっかりと守ってください」

「わかったわ。後は頼むわね」



ムッシュは『アニマルヒル』へ戻ると、マダムの家を訪問した。

「マダム、ご安心ください。今夜、遅くとも明日の早朝までには、ジェーンをあなたの元に返してあげられそうです」

「ほんとですか？ ムッシュ。ジェーンは見つかったの？」

「他の子猫たちも全員無事でした。スペンスさんをお願いしましたから、今夜には助け出せるでしょう」

「でも……」

「でも、何でしょうか？」

「ぬかよるこびにならないでしょうね」

「私と長老を、信じていただいて大丈夫です」

ムッシュはそれだけ言うと、一礼をしてマダムのもとを去った。

夜になると、どこからともなく猫、犬、鳥が小屋の周りに集結した。

「猫は人間に気付かれないように裏手に、鳥は小屋の周りの木に、犬は小屋の横に」と長老の  
スペンスが指示を与えている。

「いいか、マイクが子猫と外に出てきたら、行動をおこすんだぞ。それまでは息を潜めていて  
くれ」

それぞれが位置に着き、じっとマイクが戻ってくるのを待った。

「来ましたよ」 ムッシュがスペンスに囁いた。

何も知らないマイクは、小屋に入ると懐中電灯をつけ、持ってきた大きな麻袋の中に、子猫を  
つぎつぎと投げ入れた。

その袋を肩に担いでドアから姿を現したとたん、鳥たちがマイクめがけて急降下し、犬たちが  
吠え、マイクの足に噛み付いた。

「なんだ、なんだ、これは。 ひえー、助けてくれー」 マイクは叫び声をあげ、担いでいた袋  
を放り出した。

猫たちが一斉に袋に駆けつけ、一匹ずつ子猫を啜え『アニマルヒル』へと向かった。

「全員助けた。ひきあげるぞ。 人間が集まってくる、急げー」 長老の声で鳥も、犬も、猫も  
一斉に小屋から姿を消した。

騒がしい動物たちの声に驚いた近隣の住民が集まってきた。

マイクは小屋の入り口で、うずくまっていた。咬まれたり、つつかれたりした足や手が痛む。

「一体なにがあったんです？」 住民の知らせで駆けつけた救急車の隊員がマイクに尋ねた。

マイクは恐怖で口をガクガクさせるだけだった。

ムッシュはそれを見届けると、静かにその場を離れた。



『アニマルヒル』に平和が戻った。ジェーンもマダムに守られてすやすやと眠っている。  
「ムッシュにお礼を言いたいんですけど、どこにいるんでしょうか？」 マダムはスペインに尋ねた。  
「ワシが知りたいくらいですよ。あの後、だれもムッシュを見たものはいませんな」  
「マイクに子猫を誘拐させた人間は、どうなったんでしょう？」  
「動物虐待の罪とかで、捕まりましたよ。マイクが全てを話したようです。近頃はおかしい人間が多くなりましたな。子猫を生贄にするビデオを撮って、売りさばっていたそうだが、買う人間もいるということですよ」  
「二度とそんな人間が現れないことを祈るだけですな」マダムはため息をついた。  
「まったくそうですな。しばらくは、この町で動物たちも平和に生きることが出来ます、ムッシュのお陰でね。さて、ワシもゆっくり昼寝をさせてもらおうとしよう」  
スペインは大あくびをすると、いつものねぐらへと帰っていった。



終わり